

中学校

平成6年度

# 教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員(国語)

班	地区名	学校名	職名	氏名
教育機器活用研究班	新宿区	淀橋第二中学校	教諭	太田和良
	世田谷区	駒沢中学校	教諭	升平克也
	荒川区	第十中学校	教諭	◎福井満義
	練馬区	南が丘中学校	教諭	塚田典男
	江戸川区	小松川第一中学校	教諭	中村佐代子
	八王子市	松が谷中学校	教諭	直井孝夫
	小平市	花小金井南中学校	教諭	○福岡昭彦
	狛江市	狛江第四中学校	教諭	佐々木三好
	三宅村	阿古中学校	教諭	広瀬光代
音声言語研究班	港区	高松中学校	教諭	渡邊常次
	文京区	第二中学校	教諭	笹川三恵子
	墨田区	向島中学校	教諭	川崎法人
	杉並区	杉森中学校	教諭	梅澤七重子
	足立区	花保中学校	教諭	石山貴子
	東村山市	東村山第四中学校	教諭	○岩下敏夫
	多摩市	東落合中学校	教諭	山口茂
	日の出町	平井中学校	教諭	梅田尚之

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 新藤久典

目次

I	主題設定の理由	1
II	研究内容	2
1	第1分科会：教育機器活用研究班	2
	(コンピュータ等教育機器の活用)	
2	第2分科会：音声言語研究班	13
	(ディベートを通して「聞く力」「話す力」を育てる)	
III	研究のまとめと今後の課題	24

## 生徒が興味・関心をもち、主体的に活動する指導法の工夫

## I 研究主題設定の理由

近年、国際化・情報化等、社会の変化が急激に進み、価値観もますます多様化してきている。このような社会の変化に対応していくためには、様々な事象に対して、自ら判断し、決定していく能力や態度を育成していく必要がある。生徒個々の興味・関心を生かし、学習への意欲を喚起するとともに、生徒一人一人の想像力や思考力・判断力、また、その独自性も含めた総合的な力を学力としてとらえる視点をもつことが指導者に求められている。

こうした学力観に立ち、国語学習において、表現や理解の基礎的、基本的な力を養うとともに、一人一人の生徒が自ら学ぼうとする意欲をもち、主体的に学習に取り組む態度を育む指導内容・方法を工夫改善することが必要である。

生徒の国語学習における実態を見ると、表現することを好み、文章・詩歌などの創作を積極的に楽しむ生徒や幅広い読書を楽しむ生徒がいる一方で、国語の学習について、主題・要旨の読解、漢字・語句、文法といった知識・理解を中心とした狭いイメージでとらえている生徒も多く、国語に対する好感度は他教科と比べて低い。そのため、学習課題に自ら進んで取り組もうとする意欲に欠ける生徒、自ら考えることをいとい進んで発言することを嫌がる生徒、教師や他の生徒の発言を待つ生徒、さらには、板書を写すだけといったような受け身の学習活動に終わってしまう生徒も見受けられる。これらの傾向は学年が進むにつれて顕著になる。

また、指導の実態にも問題があると思われる。現行学習指導要領の趣旨については十分理解が深まっているが、その趣旨を生かした指導の工夫改善については教科経営の視点から見て、十分とは言えない状況にある。個別指導の重視、視聴覚機器の活用、小集団学習など学習形態の工夫、チーム・ティーチングの導入など、指導者個々には多様な試みが見られるが、学校全体として、地区の研究会等組織的な研究はまだ不足している。

こうした国語教室の現状を改善するためには、生徒一人一人の興味・関心を的確に把握し、自ら進んで学ぼうとする力、学ぼうとする態度や姿勢を身に付ける指導内容・方法を研究する必要がある。

生徒の国語学習への興味・関心を高め、主体的に学習しようとする態度を育成することは国語教育の重要な課題の一つである。生徒が自分にふさわしい学習課題をもち、興味・関心をもって進んで学習に取り組んでいく、そういった学習過程によってこそ、国語に対する関心・意欲が高められ主体的な学習態度は育成される。そうした力が育てば、生徒個々の国語学習に対する関心・意欲がさらに高まり、学習課題が深化していく。すなわち、生徒がある学習活動に取り組む中で、その学習のもつおもしろさを理解し、その学習活動が楽しみになり、またやってみたい、今度はもっとうまくやりたい、次のステップに進みたい、という気持ちを育てることができる。

以上のような観点から、研究主題を「生徒が興味・関心をもち、主体的に活動する指導法の工夫」と設定し、研究を進めることとした。

## II 研究の内容

### 【第1分科会：教育機器研究班】

分科会副主題＝コンピュータ機器等を活用して、生徒が主体的に活動する指導法の工夫

#### 1 本分科会の基本的な考え方

東京都の全公立中学校にコンピュータが設置され、多くの教科の授業で利用されつつある。しかし、国語科としての取り組みはまだまだ端緒にすぎたばかりである。様々な取り組みは見られるが系統的な指導計画についてはまだ試案の域を出ていない。しかし、ここ10年間の状況を見ても、ワープロやコンピュータの普及は目覚ましく、生徒にとってもかなり身近で、興味をもって取り組める機器になっている。

個人の進度に合わせた学習が可能であり、コンピュータを活用して主体的に学習しながら、教師から個別に助言・援助を得ることができ、文章の添削・校正などがしやすいことなどが、コンピュータ機器の大きな特長である。

このようなコンピュータ機器の様々な特長を国語の授業に生かしながら、学習への興味・関心を高め、主体的に取り組める授業を工夫したい、というのが副主題設定の理由である。

#### 2 仮説

表現領域・理解領域・言語事項の各分野を、コンピュータ等教育機器を活用した授業を工夫することにより、生徒は興味・関心を高め、主体的に授業に取り組むことができる。

#### 3 研究の方法

本分科会では、以下のように授業研究を中心として、仮説を実証するための研究を進めた。様々な単元でコンピュータ機器の活用を工夫した。また、機器の学校間差・生徒の操作技術の習熟度の差に応じた指導法を工夫した。

6月14日	新宿区立淀橋第二中	文法（品詞）	ドリル型・ソフト作成
9月20日	練馬区立南が丘中	短歌（鑑賞・作者）	ドリル型
9月30日	狛江市立狛江第四中	漢文（訓点）	ドリル型
10月14日	江戸川区立小松川第一中	古典（仮名遣い）	音声
11月9日	世田谷区立駒沢中	文法（文の成分）	ドリル型
11月16日	三宅村立阿古中	表現	ワープロ
11月25日	八王子市立松が谷中	表現	ワープロ
12月9日	荒川区立第十中	古典	ドリル型・ソフト作成

夏季休業中 コンピュータ及びその周辺機器、学習用ソフトの活用の仕方、それらを活用した授業の有効性等について研究し、学習指導案を作成し、研究授業の準備を行った。

以上のほかにも、随時研究協議をし、年間計画等を作成した。

#### 4 研究のねらい

コンピュータ機器はCD・ビデオ等の他の教具と異なり、教師が生徒に対して一方的に教材を提示するものではない。生徒は学習ソフトを活用し学習に主体的に取り組まなければならない。そして、操作の習熟段階に応じて内容が充実し、興味・関心が高まっていく。コンピュータ機器を活用すれば、「一斉授業」「個別の進捗」「各自の表現」も授業の中で交互におこなったり、深めたりすることができる。コンピュータ機器は国語の授業の多くの場面で有効な機能をもっている。しかも、発展的に学習を深めていくこともでき、有効である。

しかし、実際にコンピュータ機器を活用した授業を展開するためには、操作技術・学習ソフトの整備状況、機器の種類など各学校の状況は異なり、課題も多く存在する。それらの様々な課題を克服しながら、指導者の機器習熟状況に応じた指導の在り方を研究した。

機器に習熟していない指導者の実態があるなかで、機器の有効的な活用を進めるために、機器の習熟の難易度、学習ソフト・ハードの整備状況を考え、次のような段階を考えた。

段 階	ソ フ ト	有効な周辺機器	有効利用できる単元
第1段階A	ドリル	LAN	漢字・文法・古文・俳句短歌
第1段階B	データベース	CD-ROM	文学史・短歌俳句の技法・漢字
第2段階A	ワープロ	イメージスキャナー	表現・作文・自己紹介・文集
第2段階B	絵描き	イメージスキャナー	新聞・文集・表現
第3段階A	ネットワーク	LAN・書画カメラ	全コンピュータ授業・ディベート
第3段階B	通 信	モデム	全コンピュータ授業
第4段階	ソフト作成	イメージスキャナ ビデオキャプター フィルムリーダー オーディオカード	全コンピュータ授業

#### 周辺機器の分類

補助記憶装置・読みだし専用記憶装置

通信伝達装置

映像関係

音声関係

ハードディスク、MO、CD-ROM

LAN、モデム

書画カメラ、イメージスキャナ

フィルムリーダー、ビデオキャプチャー

オーディオカード、MIDI音源

## 5 指導事例

- (1) 実施対象学年 第2学年(3学級93名)
- (2) 単元・教材名 表現の豊かさ「短歌・その心」(M社)
- (3) 研究主題とのかかわり

言葉には、人の思いが強く託されている。そして、その思いを伝えるために、様々な表現の工夫がなされてきた。その一つに短歌がある。短歌を学ぶことは、我々日本人が長い歴史の中で培ってきた様々な言語表現の工夫に触れることであり、我々の言葉に対する思いの深さに触れることにつながる。このような観点から、この単元では、近・現代の短歌を素材として、言葉のもつ意味の深さや表現者の心情が、どのような方法(形式・技法)によって表現されているかを理解させたい。そこで、これらを生徒が興味・関心をもって学習できるように、コンピュータを活用する。ドリル型学習ソフトによる知識の定着と、データベースによる主体的学習が期待できる。

### (4) 指導上の工夫

- ① ドリル型学習ソフトを利用することで、個々の進度に合った学習教材を提示する。
- ② ネットワークシステムの活用により、一斉・個別指導を行う。
- ③ 学習ソフトを使用するための、コンピュータ操作指導を行う。
- ④ 作者の心情を考えながら、自分自身の心情を適切に表現できる言葉を身に付けさせる。

### (5) 生徒のコンピュータ操作能力の実態

コンピュータを利用した経験がある生徒は74名であった。その利用状況は右のとおりである。授業で利用した経験のあるのは選択技術科においてであり、したがって、コンピュータ室を利用するにあたっては、操作指導の必要があった。

過去の利用状況

(複数回答)

- ・お絵描き 47人
- ・ゲーム 34人
- ・ワープロ 28人
- ・計算機 5人

### (6) 授業者のコンピュータ操作技能の実態

ワープロにはある程度習熟していたので、キー操作、フロッピーディスクの取扱いには慣れていたが、コンピュータに関してはほとんど知識がなかった。

## 7 指導計画(7時間扱い)

段階	ね ら い	生 徒 の 思 考 の 流 れ
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「1」の依万智の短歌と解説文を通読し、日常生活の中にある感動に気づかせる。</li> <li>・短歌の形式を理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感動の中心になっている語句を見つける。</li> <li>・短歌に表現された事柄が、ごく日常的な事柄であることに気づく。</li> <li>・短歌の形式について資料集で調べる。</li> </ul>
第二時 第三時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正岡子規の短歌と解説文を通読し、子規の短歌の特徴と短歌の歴史を理解させる。</li> <li>・残りの短歌と解説文を通読し、それぞれの短歌の感動の中心を考えさせる。</li> <li>・短歌の技法について理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子規の生立ちを追い、作品の特徴と作品に込められた心情を考える。</li> <li>・資料集で「万葉集」「古今和歌集」について調べる。(万葉調、古今調)</li> <li>・解説文を参考に、感動の中心をとらえる。</li> <li>・それぞれの作者の心情をとらえる。</li> <li>・句切れ、字余り、対句、体言止めなど。</li> </ul>
第四時 第五時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータの扱い方を理解させる。</li> <li>・学習ソフトの使い方を理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リテラシーテキストにより、コンピュータ室の利用の仕方、コンピュータやフロッピーディスク等の扱い方を理解する。</li> <li>・学習ソフトのリテラシー(起動と終了・必要なキーの操作と働きについて)</li> </ul>
第六時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短歌の基礎知識の確認と定着を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ソフトを起動し、学習する。</li> <li>・問題の解決にヒントやデータベースを活用し、自主的に学習する。</li> <li>・学習ソフトを終了する。</li> </ul>
第七時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の気持ち(感動)を表現させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休みの体験・経験をもとに短歌を作る。</li> </ul>

(8) 本時の展開

ア 本時のねらい 学習ソフトを活用しながら、自主的・意欲的に短歌の基礎知識を習得することができる。

イ 本時の流れ

時	身につけさせたい力	フローチャート	教師の活動	生徒の活動	利用機器等の有効性
10分	学習ソフトの起動	授業準備 ↓ 授業開始 ↓ 学習課題の確認 ↓ 学習ソフト起動	・フロッピーディスクと学習プリントを配布する。 ・ホスト機の電源ON。 ・PC-Semi 一斉送信で本時の学習について説明する。 ・PC-Semi により全員が起動できたか確認する。	・コンピュータの電源ON。 ・ヘッドセットで説明を聞く。 ・学習ソフトを起動させる。	・ヘッドセットで集中して聞ける。 ・PC-Semi オートスキャンで進捗が確認できる。
30分	句切れ・体言止めについての知識。 短歌の鑑賞表現を考える。 著名な歌人についての知識(データベースによる調べ学習。)	学習コースの選択 ↓ 学習開始 ↓ 問題を解く ↓ 本時のまとめ ↓ 次時の課題確認 ↓ 学習ソフト終了	・PC-Semi による進捗の確認と助言。 ・PC-Semi による助言。操作のミスには、リモート機能で対応する。 ・「まとめの問題」の終了をPC-Semi で確認する。	・メニュー画面より「まとめの問題」を選ぶ。 ・プリントで確認しながら学習開始。 ・二人で協力しながら問題解決に当たる。随時データベースを活用する。 ・内容・操作などがわからないときはコールボタンにより、教師の助言を積極的に受ける。 ・「まとめの問題」終了後、正解数により、 ①データベースで復習し、もう一度やり直してから②へ進む。 ②データベースを利用してプリントを完成させる。	・データベースが資料集として使える。 ・PC-Semi オートスキャンで各機の進捗を確認し、必要に応じて個別指導と助言を行う。 ・一斉・中継送信とリモート機能で、個々の課題解決や操作上の疑問を、全体への助言として取り上げられる。 ・PC-Semi オートスキャン利用。
10分	学習ソフトを終了できる。 コンピュータを終了できる。	授業終了	・プリントが終了したことを確認する。(各機ごと) ・PC-Semi 一斉送信により次時の予告をする。 ・PC-Semi で学習ソフトの終了を確認する。 ・PC-Semi でコンピュータの終了を確認し、ホスト機の電源OFF。 ・フロッピーディスクの回収を確認する。	・プリントが終了したら、コールボタンを押して指示を待つ。 ・次時の予告を聞く。 ・学習ソフトを終了させる。 ・コンピュータの電源OFF。 ・フロッピーディスクを所定の位置に戻す。	・PC-Semi 操作ボードのランプの点滅で確認できる。 ・PC-Semi 一斉送信で指示の徹底が計れる。 ・PC-Semi オートスキャンと操作ボードのランプで確認。

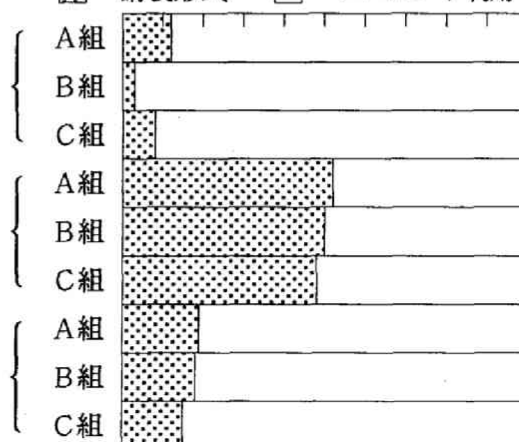
(9) 一斉授業との比較(授業後の生徒の反応)

第6時(本時)については、第2学年3クラスのうち1クラス(A組)については、この授業案によらず、普通教室で、プリント・資料集による一斉授業を行い、コンピュータを利用した他のクラスとの比較を行った。以下は、生徒の反応をまとめたものである。

[回答数: A組...29名、B組...30名、C組...29名]

- ① 講義形式の授業とコンピュータ利用の授業(以下、コンピュータ授業)では、どちらがやる気(意欲)が出たか。
- ② 講義形式の授業とコンピュータ授業では、どちらが理解しやすかったか。
- ③ 講義形式の授業とコンピュータ授業ではどちらが印象に残っているか。

☒ = 講義形式    □ = コンピュータ利用



④ 講義形式の授業とコンピュータ授業の長所・短所はどんなことか。(生徒記述)

[コンピュータ授業の長所]

ア コンピュータ機器の便利さ

- コンピュータ自体に興味をわいてくるから、頭の中に入りやすい。
- 調べたいときにすぐできる。自分で探すのもいいけど、「パッ」と出たほうがいいと思う。
- イラストが出てきて楽しいし分かりやすかった。「ヒント」等はすごく分かりやすかった。
- ゲーム感覚でできる。
- とても便利だった。答えが出しやすい。
- 使うものがフロッピーとプリントだけで良い。フロッピーはノート感覚で使える。
- 今までの授業の中で一番楽しく、コンピュータ授業のほうが楽しみ。
- 成績が出てどのくらいできたかわかる。

イ 授業内容

- 先生が与えてくれるヒントは分かりやすいのですぐ答がでる。でも、コンピュータのヒントは簡単なのですぐ答えが出ない。その分、いろいろとじっくり考えられる。
- 資料が調べやすく、例題(問題)が多く、大事な言葉がわかりやすく表されている。
- 国語の勉強もわかるようになるし、コンピュータの扱い方も分かるようになる。

ウ 主体的な学習

- 国語に対する興味を深めることができた。その場その場で理解できるので次の問題にも進みやすい。
- やる気がでた。とても分かりやすくおもしろい。
- プリントのノルマを達成しようと意欲がでる。問題をやることによって印象に残る。
- 自分の手で動かせる。
- 分からなくなったのがわかる。

エ 機器の有効性

- 先生のことを呼びやすい。(コールボタン、ヘッドセットで会話できてよかった。)
- 講義だとうるさいときなど聞き逃してしまうが、いつまでも画面に文字が出ている。
- みんなうるさくないので集中して勉強ができる。ボーッとする時間がほとんどない。
- 「友達同士で教え合うことができる。」ことがとてもよいことだと思います。
- 普通の授業だと、分からないと思ったら何も考えなくなってしまうけれど、コンピュータだとわからないと前に進めないからよく考えて勉強できる。
- 余談やムダなことを省いている。

[コンピュータ授業の短所]

- 目が疲れる。 • 耳が痛くなる。 • 勉強した感じがしない。
- ヘッドセットが邪魔。
- 選択問題しかできない。
- キーボードを打つほうがめんどくさい。
- 発言できない。



〔普通授業の長所〕

- ・コンピュータ授業は、まだ「学習する」という感覚で受けられません。コンピュータの操作を重視してしまうからです。私は、コンピュータが好きです。が、授業としては講義形式のほうが「学習した」と感じられるのでいいと思います。
- ・コンピュータ授業で人によって差がつくのは嫌です。コンピュータ授業でも、人の意見が聞けたりすると参考になると思います。慣れていないせいかもしれないけれど、講義のほうがよく覚えていると思いました。
- ・みんなと一緒に進むことができる。
- ・音（声？）があっていい。（ ）内は執筆者註
- ・発言できる。記録が取れる。

〔その他の意見〕

- ・コンピュータでの授業は、操作に慣れてしまえば速くてより正確なものになるかもしれないけど、初めのほうは操作の説明に時間がかかり内容の薄い授業になってしまうと思う。
- ・コンピュータはあまり使わないので少し恐怖がある。
- ・コンピュータ授業は友達と協力してやることができたし、初めての人でも結構簡単にできたのではないかと思います。だけど、一人一人違った意見を出すことがないので、その点はふだんの授業のほうがいいと思います。
- ・コンピュータを使って勉強すると、自分たちのペースで勉強できていいけれど、普通教室で勉強したほうが集中できる。
- ・普通授業だと自分で調べるから印象に強く残っているけど、コンピュータでは、「答がすぐでるから」と甘えがでてきてしまう。だから、予習・復習をするにはコンピュータはいいと思うけど、それ以外では普通の授業のほうがいいと思う。
- ・データベースで調べた時に私にとっては分かりにくいヒントがあった。普通授業だと資料を調べる時間がなくて調べそこなう。
- ・コンピュータにはコンピュータの、講義には講義のよさがあるので、どちらかを選ぶことは難しいと思う。大多数の人が、コンピュータを選ぶと思うけれど、やはり、いずれ飽きてくると思う。まあ、ファミコンと同じである。
- ・やる気がすごくでるけど、説明が分かりづらい。

(9) 授業を終えて

今回の指導計画の中でコンピュータを利用したのは、コンピュータ操作指導も含めて、3時間。生徒は勿論、授業者も手探りの状態であった。コンピュータの操作もできなかった授業者にとって、国語学習への有効性などはわかるはずもなく、ただそれを信じるのみであったのが本音である。しかし、そんな状況の中で、初めてヘッドセットをつけた生徒たちは次々と現れる画面に真剣に取り組んでいた。また、コールボタンを押して助言を求めた後に、ごく自然に「ありがとうございました」と、普段の教室では見られない場面も現れた。さらに、上記の生徒の声にもあるように、今回の授業をとおして、生徒たちが、単に「おもしろかった」「楽しかった」だけでなく、ドリル型学習ソフトの有効性（または限界）を感じ取ってくれたことが収穫であり、今後の更なる工夫と研究の必要性を痛感した。

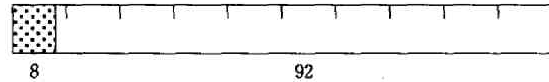
6 国語科教員のコンピュータの活用状況

(1) 本分科会の研究副主題を検証するために、国語科教員のコンピュータの活用の実態を把握することを目的として、以下のようなアンケート調査を行った。調査対象は分科会所属委員が勤務する学校の区市町村の中学校とし、500名を超える回答を得た。

(2) アンケート調査の結果（数字はパーセントを示す。）

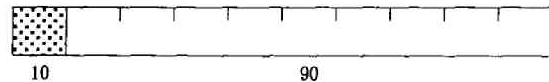
① コンピュータを使って授業を行ったことがありますか。

■=ある  
□=ない



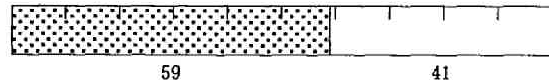
② コンピュータを使った国語の授業を見たことがありますか。

■=ある  
□=ない



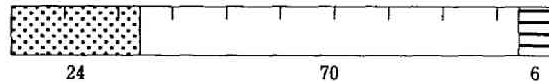
③ コンピュータを使った国語の授業に関心がありますか。

■=ある  
□=ない



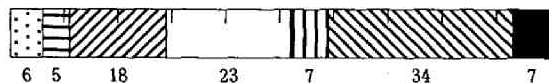
④ 国語の授業にコンピュータを活用することは効果があると思いますか。

■=ある □=ない  
▨=どちらとも言えない



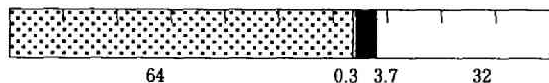
⑤ コンピュータの操作指導は済んでいますか。

▨=1年 ▨=2年 ▨=3年  
□=全学年 ▨=選択授業  
▨=やっていない ■=その他



⑥ コンピュータの操作指導は誰が行いましたか。

■=技術科 ▨=国語科全員  
■=自分 □=その他



(1、で「ある」と答えた方へ ⑦から⑩)

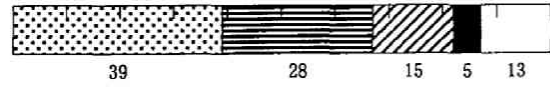
⑦ 授業をされたのはどんな分野ですか。(複数回答可)

■=文法 ▨=短歌・俳句  
▨=古典 ■=説明的文章  
▨=文学的文章 ▨=作文  
□=その他



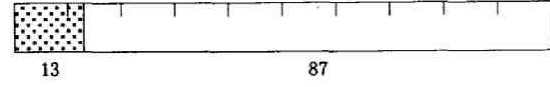
⑧ コンピュータで授業された回数は何回ぐらいですか。

=1-2回   =3-4回   =5-6回  
=7-8回   =10回以上



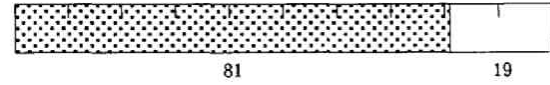
⑨ お使いになったソフトの種類は何ですか。

=自作ソフト  
=市販ソフト



⑩ コンピュータを使ったときの授業時の、生徒の興味・関心はどうでしたか。

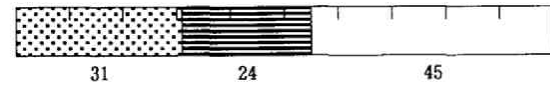
=非常にあった  
=いつもと変わらない



(①、で「ない」と答えた方へ)

⑪ 今後コンピュータ授業をしてみたいと思っていますか。

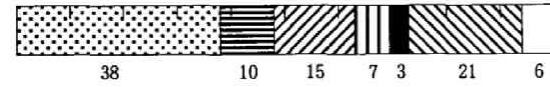
=思っている   =迷っている  
=思っていない



(⑪、で「思っている」、「迷っている」と答えた方へ)

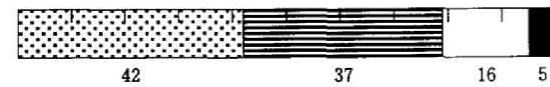
⑫ どんな分野で授業をしてみたいと思いますか。(複数回答可)

=文法   =短歌・俳句  
=古典   =説明的文章  
=文学的文章   =作文  
=その他



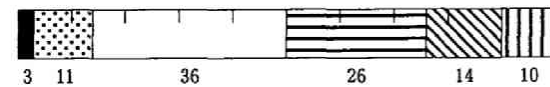
⑬ どんな条件がそろえばしてみたいと思いますか。(複数回答可)

=操作技能   =ソフトの整備  
=生徒のリテラシー   =その他



⑭ コンピュータを使って授業をなさらない理由は何ですか。(複数回答可)

=教室の環境が不十分  
=操作指導は済んでいない  
=コンピュータの操作ができない  
=国語になじまない  
=人間同士のふあいがなくなる  
=その他



※その他の内容

- ・準備の時間がない   ・活用できるソフトが不十分   ・ハード面の整備が不十分
- ・導入する必要性を感じない   ・機器に頼ることの弊害が多い   等々。

以上のアンケート結果から、次のようなことが言える。

- ① 問1・2・3の結果から、国語科教員のコンピュータ機器利用に対する考え方がよく分かる。つまり、関心はあるが、機器をどのように活用すればよいか明確ではなく、また、実践事例も少ないため、どこから始めればよいか分からないと感じている国語科教員が多い。そのため、問4の機器の活用の効果について「どちらともいえない」が70%にも上っている。しかし、教員の現状とは逆に、問5から、生徒の70%近くは何らかの形で操作技能の指導が済んでいる。教員が一步踏み出すことができれば、国語の授業で活用できる環境にあるのである。ただ、問6から、その操作技能の指導も学校間の格差が大きく、指導するのが、技術科64%、その他32%になっていて、全校生徒への指導ができていないのは、23%に過ぎないのが現状である。このあたりの体制が確立されていくと、国語科教員の一步が踏み出しやすいと考えられる。
- ② 問7・8・9・10はコンピュータを使って授業を行った教員の回答だが、問10からコンピュータを使った授業での生徒の興味・関心は「非常にあった」が81%とかなり高い。ただ、この興味・関心が授業そのものに対するものなのか、コンピュータ機器に対するものかは慎重に考えなければならないが、コンピュータルームに初めて入り、機器を操作した生徒は新鮮な気持ちで授業に取り組んでいるはずである。今後、回数を重ねて、操作にも慣れたときに授業そのものに対する興味・関心の本当の評価ができると思う。
- ③ 問11・12・13・14はコンピュータを使って授業をしたことがない教員の回答だが、「今後もコンピュータ授業をしようとは思わない」が45%いる。その理由の42%は自分自身の操作技能の問題である。この問題は教員の意識変革ですぐに解決できる問題である。実際に、本分科会の9名のほとんどが、この研究で初めてコンピュータを使用して授業を行った状況からも十分可能だといえる。問14のコンピュータを使用した授業をしない理由で、36%が「コンピュータは国語の授業になじまない」と回答している。確かに、コンピュータ機器が国語のすべての教材になじむはずはない。しかし、CD・ビデオ・ワークブック・資料集などが国語の教材になじむならば、コンピュータ機器も同程度か、それ以上になじむはずである。また、26%が「人間同士のふれあいがなくなる」と回答している。国語という教科の性質上、顔を見合わせながら、いろいろなやりとりをする中で学んでいくことが大切である。その方法の一部として、コンピュータ機器を使って他の生徒の作品を次々と間近に見ながら、意見を交わしていく授業も効果的だと考える。
- ④ このほか、問14の「その他」で「準備の時間がない」「導入する必要性を感じない」という意見があった。限られた時間内で取り組むことにより生徒は喜びを感じてくれる。国語で教えなければならないことの中には、コンピュータ機器を活用した方がより効果的なこともある。まずは、教師が自分で受けてきた教育の記憶、自分の今までの教職経験の記憶に寄り掛けることをやめ、新たな視点をもって挑戦する意欲をもつことが大切である。

以上がアンケート結果からの考察である。今後、各学校の実態に則して、様々な困難を克服して取り組んでいるコンピュータを活用した授業をより多く見ることから始めることを勧めたい。その時の生徒たちの反応をみれば、これからの国語の指導方法の一つの工夫としての答えを見出せるはずである。

## 7 研究のまとめ

本分科会のメンバー9名のうち、コンピュータ機器を活用した授業を行った経験のある者は2名、コンピュータを活用した授業を参観したことのある者もほとんどいない状況で、コンピュータ機器を活用した授業を初めて見て「自分も試したい」と研究を始めた。

コンピュータ機器を活用した授業は静かである。ヘッドセットを利用すると、教師の声も生徒の声も教室には聞こえない。自分の進度に合わせた学習を進めていく生徒が教師の援助を得ながら静かに活動している。しかし、静けさの中に学習意欲が強く感じられる授業である。文法の学習に喜々とした表情で取り組む生徒を見て、教師自身がコンピュータ機器を活用して授業を実践してみようという意欲が湧く。こうして本分科会の研究はスタートした。

自らの意欲から始まった研究ではあるが、それぞれの学校の実態に伴う困難をいかに克服するかというところから研究を始めなければならなかった。このことは本報告書を読む多くの教師にも共通する課題である。

### (1) 年間指導計画の必要性

生徒がコンピュータ機器の操作技能に習熟することによりその操作時間が短縮され、活用内容も充実していく。国語の授業にコンピュータを活用するには、この操作に習熟する段階を経なければならない。コンピュータ操作技能の習熟は国語学習の目的ではない。そこで、コンピュータ操作技能の習得については全校で取り組む体制の確立が大切である。国語の教師が学校の中に孤立しては有効な活用は望めない。それでも、学習ソフトに習熟していく段階は国語学習で行う必要がある。コンピュータ機器は各単元の学習で多様な工夫を有効にする。しかし、1年間に1つのソフトを数時間利用するだけでは、生徒の興味・関心をさらに高める国語の授業にはならない。生徒は、第一次段階でコンピュータ機器の操作に興味・関心をもつ。第二次段階では、操作に習熟した生徒は授業内容に興味・関心をもつ。次の段階では、生徒はコンピュータを活用して自ら進んで学習に取り組むようになる。以上のような段階を踏まえて年間指導計画を立てることが必要になってくるのである。

### (2) 年間指導計画例（コンピュータを活用した年間授業時間数）

教科書、コンピュータ教室の利用状況、利用学習ソフトなど、各学校の実態に応じて計画することが望ましい。

	第1学年		第2学年		第3学年	
	最大	最小	最大	最小	最大	最小
操作技能	4	2	1	0	1	0
文学的文章	7	4	7	4	7	4
説明的文章	2	1	2	1	2	1
漢字・文法	10	5	9	5	8	4
古 典	2	1	2	1	2	1
作文・表現	0	0	10	6	12	7
合 計	25	13	31	17	32	17
基本時間	19		22		26	

本分科会では、自分の授業計画の一単元でコンピュータを活用して授業を行い、初心者段階から仮説の検証をする形式で研究を進めていった。一単元のコンピュータ授業で、コンピュータ機器の活用的一部分ができていく。単元の目標が違うのであるから、目標に合わせた活用の仕方も違っている。様々な単元・教材で活用の仕方のアイデアが出て、検証授業に織り込まれていった。研究の中で明らかになった点をまとめると、次のようになる。

- ① コンピュータ操作指導が済んでいない生徒は、第一に興味・関心がコンピュータ機器の操作に対して向く。入力方法が簡単なドリル型のソフトであれば、内容の理解や定着まで主体的に取り組むことができる。反面、操作・入力方法を習得しないと機器に対しても興味・関心を失う。操作に習熟した段階では、学力の不足している生徒はヒント・解説などが工夫されたソフトでも、ドリル型ソフトには、若干苦手意識をもつ。また短時間で知識の確認ができた生徒はゲーム感覚になり物足りなさを感じてくる。
- ② データベースを活用すると、調べ学習に主体的に取り組むことができる。プリントとの併用で定着させたい知識に興味・関心をもたせやすい。しかし、板書と同様に書き写すには時間がかかるので、内容が多い場合や書くのが遅い生徒には適さない。
- ③ 表現学習の文章的教材では、構成・添削・推敲・飾り付け・強調がしやすく、興味・関心をもち、主体的に取り組むことができる。データフロッピーの使用で作品の管理が簡単である。しかし、2人に1台の状況では入力に時間がかかり過ぎるので、他の教材と組み合わせるなどの工夫が必要になってくる。今後、一人1台の整備が望まれる。
- ④ 表現作品の相互評価や個別の指導が受けやすいので自己評価の力がつき、主体的に自己の作品を向上させようという意欲が出てくる。しかし、入力に習熟しないと作品が未完成になってしまうので、個別に時間設定などが必要になってくる。

以上のように、コンピュータ機器を活用することによって、「生徒が興味・関心をもって、主体的に活動する授業」を工夫することはできたと考える。

これからの課題として、第一にコンピュータ機器や周辺機器、そして学習ソフトの内容を充実させることを挙げたい。ソフト、ハードが充実すれば、授業法の工夫の可能性は無限大に広がる。第二にコンピュータに対する学校・学年・各教科の体制ができることを挙げたい。体制ができれば、最大の問題となる入力の習熟が解決でき、学習内容が充実していくことは確実である。また、本研究ではソフト開発を第4段階にしたが、教材に準拠したソフトは現実としてほとんどない。しかも、教材開発用ソフトと周辺機器がそろっている学校もほとんどないのである。教員にコンピュータに関する知識・技能があり、時間があってもソフト作成はできないのが現状である。しかし、これらの課題がすべて解決されたとしても、コンピュータ機器が国語の授業において万能であるはずはない。感性や体験など人間だからもてるものはいまでもなく、機械からは学べないこと、機械を通さない方が良い効果上がることも多い。本分科会は、一斉授業において質問も発表もできなかった生徒がコールボタンを押してくれて、初めて会話できた喜びを感じながら、コンピュータを活用した授業の有効性を確信した。機器は万能ではないが、教師と生徒が結びついた授業を生み出すことは可能である。機器活用の仕方の様々なアイデアが、広い範囲の教師間で生かされていく環境を待ち望んでいる。

## 【第2分科会：音声言語研究班】

分科会副主題＝ディベートを通して「聞く力」「話す力」を育てる

### 1 基本的な考え

近年、教育の現場では、音声言語に関する研究、とりわけディベートを題材として取り上げたものが数多く発表されている。

しかし、ひとことで「ディベート」と言っても「何を目的とするのか」によって様々な形態のディベートが存在する。例えば、反対意見をもつグループの考えを変えさせることを目的としたもの（いわゆる企業ディベート）、資料の収集、整理に力を入れ、物事の真理の探究を目的としたもの（社会科的なディベート）、社会的な事柄を題材として、問題の意識付けを目的としたもの（道徳的なディベート）などである。

今回、本分科会が取り上げたディベートは「聞く力」「話す力」を育てることを目的としたものである。したがって、他の教科や先行研究で発表されているディベートとは、性格を異にする部分もある。

本分科会は次のような仮説を立て、授業研究を中心に仮説の実証を試みた。

### 2 仮説

- ・生徒たちの身近な事柄を論題にすることで、興味・関心をより喚起することができる。
- ・意見文の発表、聞き取りメモの活用によって、分かりやすく話すこと、人の意見の論旨を的確にとらえることに主体的に取り組むことができる。
- ・自チームの立論内容の検討、相手チームの立論内容の予測、相手チームからの質問内容の予測を通して、自分たちの考えを高め、深化することができる。また、そのことによって、さらに学習に対する興味・関心が高まり、主体的な取り組みが期待できる。
- ・ディベートマッチを経験することで、今後の学習における主体的な発表の態度、聞く態度を育成することができる。

### 3 研究の方法

音声言語班では、以下のように4回の授業研究を通して仮説を実証するための授業の在り方を研究した。

6月27日	日の出町立平井中学校	1年	『心のメッセージ』
7月7日	杉並区立杉森中学校	1年	『心のメッセージ』
9月13日	文京区立第二中学校	3年	『「表現の広場」－説得する－』
10月4日	港区立高松中学校	2年	『「表現の広場」－意見を交換する－』

この他に随時研究協議の場をもった。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のねらい

本分科会では先に述べた仮説を通して次のような2つのねらいを設けた。

1つ目の柱は、初めてのディベートであっても生徒に成就感をもたせることにより、やる気を起こさせ、積極的な学習活動を促すものとなること。

2つ目の柱は、ディベートマッチそのものに重点を置くのではなく、ディベートマッチに至るまでの学習過程を重視すること。

### (2) 研究の内容

研究に当たっては、次のような具体的な手だてを講じた。まず、第3・4時間目に生徒全員の意見文の発表と聞き取りメモの作成をさせることに力を入れる。また、ただ漠然と発表を聞くのではなく、要点をまとめる活動を取り入れる。このことにより「積極的な聞き方」の育成につながるるとともに、このメモはその後の立論作成に大きな力を発揮し、ディベートマッチにも有効な資料となると考えた。第5・6時間目に行われる立論作成は、ディベートマッチそのものを成功させるために重要な作業であり、その作業を行うグループ作りはリーダーとなる生徒を必ず1名は配するなどの配慮をする。

立論作成において、相手の立論や反論を予想することは、それが必ずしも全てディベートマッチに利用できるとは限らない。しかし、そのような試行錯誤は生徒の主体的な学習活動を促進するものとして重要な学習過程であると考えた。加えて、試行錯誤そのものは、学習者の視野を広げることにもなる。

ディベートそのものについての形態は様々であるが、根本的には自己の論理の正当性を明らかにし、相手を論破することに主眼がおかれていることに変わりはない。学校においても、各教科、道徳、特別活動等において広くディベートが行われているが、それらはいずれもディベートマッチに重点が置かれている点において、本分科会の研究のねらいとは異なる。先にも述べたように、本分科会がねらいとするものはディベートマッチそのものではなく、その学習過程において「いかにして生徒一人一人が自主的に考え、進んで発言し、積極的に相手の意見を聞くことができるか」にある。そして、そういった主体的な態度が更に「聞く力」と「話す力」を高めることにつながり、国語の授業のみならず、他教科や道徳・特別活動等における主体的な活動に通じるものであると考える。

以上の点をまとめてみると

ア 初めてのディベートマッチでも教師・生徒が不安をもつことなく楽しく、そして成就感をもち行うことができる。

イ 意見文の発表、聞き取りメモの活用、立論作成を通し生徒が興味・関心をもって主体的に「聞く力」と「話す力」を高めることができる。

ウ リーダーを中心とするグループの中で、チーム・ワークを発揮し、その中でそれぞれの役割を果たすことができる。

## 3 指導の実際

(1) 単元・教材名 「表現の広場——意見を交換しよう——」(自主開発教材)

(2) 研究主題との関わり



生徒の「聞く・話す」活動は周囲の人間関係の中で、日常の私的な会話として営まれるものと、授業や学級活動、生徒会活動・委員会活動などの学校生活、さらには校外での地域社会の様々な活動の中での公的な場面で展開されるものとに分けられる。本研究では、後者である、公的な場面での「聞く・話す」力を育成することを目標として、生徒一人一人が興味・関心をもち、主体的に活動できる授業を考察を続けてきた。

近年、様々な分野で「ディベート」の在り方が注目され、実践され、大きな効果を上げていることに着目し、ディベートを手段として、「聞く力」、「話す力」を育てる指導を工夫することにより、生徒の国語学習に対する興味・関心を高め、主体的な学習活動を促すことができると考えた。

### (3) 教材観——ディベートで授業をする理由

昨今、国語教育の現場では音声言語に関する指導の必要性が叫ばれている。しかし、実態は「それらの力を育てたいが、何をどうすれば効果的なのか」という指導者側の戸惑いも感じられる。そうした実態を考慮して、音声言語活動を活発化し、総合的な力を育てるのに有効な手段として、ディベートを考えてみた。

ディベートを通して培われる能力、態度として、

- ア 相手の話をしっかり聞く力、しっかり聞こうとする態度
- イ 自分たちの考えを分かりやすく話す力、分かりやすく話そうとする態度
- ウ 情報を収集し、整理する力
- エ 論理をわかりやすく構成する力

が考えられるが、ここでは特にアとイの育成に主眼をおいてディベートを行う。

### (4) 指導のねらい

- ア 一人一人が前に出て意見文を読み上げる、それに対して全員が聞き取りメモにまとめていく、という授業を通して、「自分の考えを述べる力」並びに「相手の話をしっかり聞く力」を育てる。(表現123ア・123イ・3ク・2ケ、理解2キ)
- イ ディベートのための立論作成、ディベートを通して論題を追求、深化させ説得力のある論を展開させる。(理解1ク・3ク、言語事項1ア・2ア)
- ウ 相手の意見をよく聞いて、相手に配慮し、尊重する心を育てる。(表現3ケ)
- エ 話し合いのルールを理解させ、身に付けさせる。(理解1ク・3ク)

### (5) 指導目標(全体)

生徒一人一人の「聞く力」「話す力」をディベートを通して高める。

### (6) 全体指導計画(全7時間扱い)

第1時……アンケート記入(学習プリント①)

ディベートについて説明し、論題を決定する。

第2時……意見文作文——決定した論題に対して肯定・否定の立場を明らかにして自分の意見を書く。(学習プリント②)

第3、4時……意見文発表——聞き取りメモに全員記入(学習プリント③)

聞き取りメモに説得力のあったものを肯定・否定それぞれ3名ずつに印をつけて提出する。

代表者決定——生徒の意見を参考に、その代表の話し合いで、肯定・否定各4グループ、計8グループに分かれる。

第6時……………立論作成——立論用紙に記入、完成する。(学習プリント④)

ディベートマッチのルールの確認

第7時……………フォーラム形式のディベート・マッチを行う。

判定者は判定・記録用紙に記入する。(学習プリント⑤)

(7) 本時の学習指導 1 (第5時)

ア 指導目標

- (ア) 進んでグループ内の討議に参加し、お互いの意見を交換することで、生徒一人一人に意欲的な言語活動を促す。
- (イ) 各グループ内で協力して立論を完成させ、テーマへの認識を深めさせる。
- (ウ) ディベートマッチのルールと方法および判定の仕方をきちんと理解させる。

イ 指導計画

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習の目標と流れを確認する。</li> <li>論題 「住むのは都会にすべきである。」 (板書)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・完成した立論用紙から説得力のあるチームを次時のディベート・マッチのディベーターとすることを確認する。</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立論作成</li> <li>①立論用紙配布、記入のための説明を聞く。</li> <li>②根拠、問題点、長所などを話し合いながら、筋道を立てて、理論を組み立てる。</li> <li>③相手への質問を考える。</li> <li>④相手からの質問の予想を立てる。</li> <li>・ディベートマッチのルールを確認する。</li> <li>①次時のディベートマッチのルールと流れを確認する。</li> <li>②判定方法の説明を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人がグループの中で話し合いに参加しているか観察する。</li> <li>・「意見文」「聞き取りメモ」を参考にしよう指示する。</li> <li>・論点がずれていないか確認する。</li> <li>・進行の遅いグループへの指導は適宜行う。</li> <li>・立論作成用紙が各グループとも完成したかを確認する。</li> <li>・判定・記録用紙を配る。</li> <li>・評価の基準を具体的に説明する。</li> </ul>
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の反省</li> <li>立論用紙と判定・記録用紙を提出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・司会者を立候補で募集する。</li> <li>・次時の予告</li> </ul>

ウ 本時の評価

- (ア) 意欲的に討議に参加し、お互いの意見を交換し合えたか。
- (イ) 立論用紙にきちんと記入できたか。

(8) 本時の学習指導 2 (第7時)

ア 指導目標

- (ア) ディベーターに相手の意見をしっかり聞かせ、自分の意見を分かりやすく話させる。
- (イ) 判定者にディベートを真剣に聞かせ、判定記録用紙にそれぞれの発言をまとめ自分なりの評価・判定をさせる。

イ 指導計画

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習の目標と流れを確認する</li> <li>・論題 「標準服はあった方がよいか。」</li> <li>・肯定派と否定派と司会者が前に出てディベートマッチの準備をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディベートマッチのルールを簡単に確認する。</li> <li>・判定・記録用紙を配る。</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディベートマッチを始める。</li> <li>＜ディベートマッチ＞の流れ</li> <li>1. 立論 (2分×2) 肯定派 (YES)、否定派 (NO) の順に自分たちの主張を述べる</li> <li>2. 作戦タイム (2分)</li> <li>3. 論戦① (6分) 否定派 (NO) が最初に質問を行う 質問にきちんと答え、かつ相手の意見のあいまいな部分をとらえた逆質問を心がける。</li> <li>4. 作戦タイム (2分)</li> <li>5. 論戦② (6分) 肯定派が最初に質問を行う</li> <li>6. 判定者からの質問・応答 (4分) (なければ無しでもよい)</li> <li>7. 最終弁論 (2分×2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・判定者全員が記録の準備ができたのを確認してから司会者に合図する。</li> <li>・判定者がきちんと記録をしているかどうかを机間巡視しながら確認をする。</li> <li>・ディベーターがルールを守って討論しているかを確認する。</li> <li>・司会者の時間配分が適切に行われているかを確認する。</li> </ul>

	<p>肯定派、否定派の順に最後の意見発表を行う。</p> <p>8、判定者はどちらが説得力があったかを判定する。(3分)</p>	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反省アンケートを書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のディベートマッチの簡単な感想を述べる。</li> <li>・判定・記録用紙を回収する。</li> </ul>

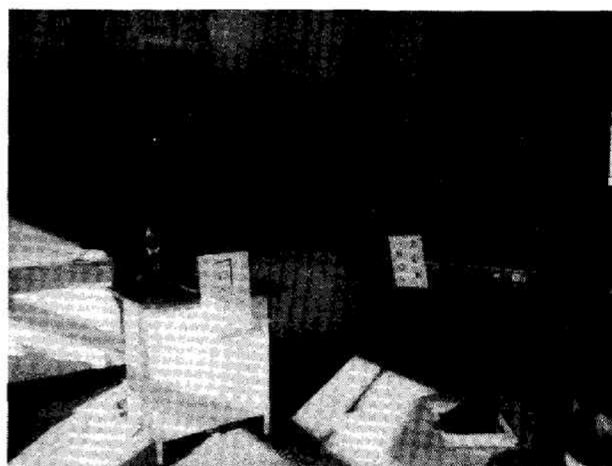
ウ 本時の評価

1. ディベーターは、相手の意見をしっかり聞き、自分の意見をわかりやすく話せたか。
2. 判定者は、ディベートマッチを真剣に聞き、判定・記録用紙にそれぞれの発言をまとめ、自分なりの評価・判定をすることができたか。

(9) 評価(全体)

生徒一人一人の「聞く力」「話す力」をディベートを通して高めることができたか。

【学習の様子：ディベートマッチ風景】



【参考資料1：学習プリント① — アンケート用紙】

国語科アンケート

☆あなたが今、興味・関心をもっていることについてのアンケートです。以下の質問に対して 正直に答えて下さい。  
：答え方・・・YESならば1、NOならば2、と( )に数字を記入すること。

①あなたは、通知簿は必要だと思いますか。

( 2 ) 理由 あっても良いと思いますが、学校もあります。自分がそれなりの努力をすれば、それなりのよい成績がとれるし、努力をしなければ、それなりの成績が自分でわかると思うので。

②あなたは、住むのは都会の方がよいと思いますか。

( 2 ) 理由 都会はいろいろ便利だけれど、田舎の方がゆとりができて、いやなことをわすれてしまいたい。その土地の人たちも温かみがあるから。

③あなたは、運動と勉強は両立できると思いますか。

( 1 ) 理由 現に両立している人もいます。両立することには自分の精神力が必要。自分のやる気次第。つねに勉強は必要。と考えると、両立はできないと思う。

④あなたは、漫画を読むのも読書と言ってもよいと思いますか。

( 1 ) 理由 よいと思う。まんがを読んでも字が読めれば大丈夫。まんがが本だから。

⑤あなたは、わりばしは必要だと思いますか。

( 1 ) 理由 本の方が便利だと思える。いろいろおはしを持っていくのは少しめんどう。

⑥あなたは、どんなに悪いことをしても、反省しては許すべきだと思いますか。

( 1 ) 理由 その人が本当に悪いことをしたと思えば反省してれば素直に許してあげられるべきだと思う。けれど、同じくらい悪いことをしたと許してあげられないとだてあるかもしれない。

①～⑥までの事例の中で、最も興味・関心のあるものは何番でしたか。2つ選びなさい。

2 6

1 年 B 組 男 - (女) どちらかを○で囲む

【参考資料2：学習プリント② — 意見文】

No. \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_

い	い	と	く	人	見	い	せ	悪	や	し	果	う	分	を	私
い	以	い	る	か	え	ビ	ん	い	動	も	果	に	の	否	は
と	上	い	の	が	る	ル	そ	空	物	も	騷	空	都	定	住
思	の	つ	は	田	し	も	の	気	な	自	音	点	合	し	む
い	こ	こ	は	舎	昆	な	田	あ	ど	然	や	舎	で	ヨ	の
ま	と	と	田	の	虫	く	で	た	生	せ	や	は	自	イ	は
す	か	マ	舎	自	や	騒	は	め	物	ん	せ	な	然	な	都
	ら	は	か	然	動	音	空	に	を	も	そ	な	を	せ	会
	私	で	い	あ	物	も	気	人	無	て	く	ら	作	な	の
	は	し	健康	あ	も	あり	は	も	理	ま	と	り	り	な	方
	住	ら	に	る	と	さ	空	て	矢	さ	作	か	か	ら	か
	む	う	よ	所	沢	ヨ	気	ま	理	い	つ	え	く	都	か
	の	か	く	へ	山	し	は	ヨ	確	り	公	た	く	会	よ
	は	。	住	治	い	甘	さ	し	壊	た	害	ま	よ	は	い
	田	み	み	療	す	人	れ	た	し	た	か	す	り	い	と
	舎	や	や	し	病	。	い	な	理	た	イ	便	。	い	っ
	の	す	す	し	気	。	た	く	確	た	て	利	。	っ	考
	方	い	い	に	の	。	し	な	壊	た	さ	と	。	考	え
	が	い	い	に	。	。	高	。	し	。	。	。	。	。	。

B 4 20×20 さくら

「住むのは都会の方がよい」

国語学習プリント

意見文 聞き取りメモ

YES派

名前	内容	意見
1 君	・店が多い(マック、ファミレス) → ・虫が多い	・7-イレ、コンビニが安く売っている
2 文	・学校が多い	・住むところは便利
3 君	・交通の便が良い	・どこにいてもバス、電車などで行ける
4 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
5 さん	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
6 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
7 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
8 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
9 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
10 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
11 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
12 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
13 さん	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
14 さん	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
15 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
16 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
17 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
18 君	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
19 文	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける
20 さん	・交通の便が良い	・バス、電車などで行ける

名前	内容	意見
1 君	・空気が良い	・川が多い
2 君	・川が多い	・木が多い
3 文	・川が多い	・山が多い
4 君	・川が多い	・山が多い
5 君	・川が多い	・山が多い
6 文	・川が多い	・山が多い
7 君	・川が多い	・山が多い
8 文	・川が多い	・山が多い
9 さん	・川が多い	・山が多い
10 文	・川が多い	・山が多い
11 君	・川が多い	・山が多い
12 文	・川が多い	・山が多い
13 君	・川が多い	・山が多い
14 君	・川が多い	・山が多い
15 君	・川が多い	・山が多い
16		
17		
18		
19		
20		

☆YES派、NO派の中で説得力のある意見文だったと思う人を3人ずつ選びなさい。

人と交流



【参考資料4：学習プリント④ — 立論用紙】

立論用紙

3年組 番氏名

メンバー:

テーマ: 「住むのは都会にすぐれよう」

テーマに対して: YES (肯定) - NO (否定) (どちらかを○で囲む)

↓ 立論

なぜ、そう考えるのか。理由をグループでまとめて、下記の\_\_\_\_\_線にあてはまるように書きなさい。《自分たちの考えが正しいと主張できるように、論理だてて説明すること。》

私たちは、A住むのは都会にすぐれようというテーマについて、B肯定という立場をとります。その理由は、次のC4点です。
①交通網の発達(地下鉄、バス、道路が整備されている。)
②緊急時の施設が豊富(救急病院、消防署、警察署)
③散歩がすぐれよう(コンビニエンスストア、百貨店)
④情報が集まる(ネット、テレビの番組が多い)。
以上の理由から、私たちは、A住むのは都会にすぐれようという考えを、B支持します。

☆質問: 相手チームの立論内容を予想し、それに対する質問を、できるだけ多く書き添えてまとめてみましょう。(1枚は、相手チームに渡す)

Table with 2 columns: 予想される立論内容 and 立論に対する質問. Content includes environmental issues, recreation, and local life.

☆応答: 相手チームからの質問内容を予想し、それに対する答え(応答)を、できるだけ多く書き添えてまとめてみましょう。(1枚は、相手チームに渡す)

Table with 2 columns: 予想される質問内容 and 質問に対する答え(応答). Content includes answers to questions about recreation, environment, and safety.

★この時間の目標 ①話し合いに積極的に参加し、意見の交換はできたか? ②立論用紙にきちんと記入できたか。

【参考資料5：学習プリント⑤ — 判定・記録用紙】

判定・記録用紙

判定者用 年組 番氏名

Table for team identification with columns for Team A (肯定チーム) and Team B (否定チーム), including member names and team stances.

◆記録は要点のみ簡潔にメモする。ディベーターへの質問は作戦タイムの間などを利用して記入する。評価はディベーター終了後に行う。

Main table for recording arguments with columns for '発言内容' (Statement Content) for both teams. Includes handwritten notes on urban vs. rural life and zoo visits.

最終評価 田舎に人が少ない分交通手段は不便で健康にはよい.

Table for final evaluation with criteria like '話し方' (Speaking style) and '聞き方' (Listening style) and a central '判定' (Judgment) box containing '否定派' (Negative faction).

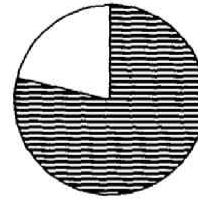
【参考資料6：ディベートに関するアンケート調査の結果】

都内8地区の小・中学校の教師を対象として実施した。

質問1 「ディベート」という言葉を聞いたことがありますか。

■=はい (78.4%)

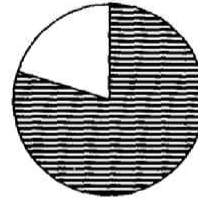
□=いいえ (21.6%)



質問2 「ディベート」に関心はありますか。

■=はい (79.7%)

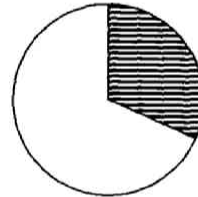
□=いいえ (20.3%)



質問3 (質問2で「はい」と答えた方) 実際に授業をされたことがありますか。

■=はい (31.5%)

□=いいえ (68.5%)



(質問3で「はい」と答えた方)

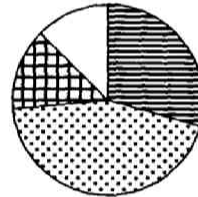
質問4 授業を始めたのはいつごろですか。

■=かなり前から (29.2%)

▨=1、2年前から (44.4%)

▩=今年度初めて (13.9%)

□=その他 (12.5%)



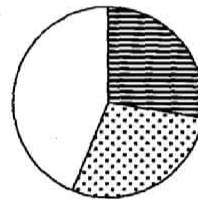
質問5 (質問3で「はい」と答えた方)

授業を始めた契機は何ですか。

■=研究会、発表会等で触発された (27.3%)

▨=テレビ・雑誌等で知った (28.8%)

□=その他 (43.9%)



※ディベートの効果について

- ・話し合いで発表しやすい雰囲気が作れた。生徒が生き生きと自分の考えを発表していた。
- ・方法に慣れるまで繰り返しやらないと効果は上がらない。
- ・資料を活用し、理論的に説明ができるようになった。自分の考えを相手の考えと比較しながら話す機会が増えた。他の生徒の意見もよく聞くようになった。
- ・自分の主張を述べるためには相手の考えをよく知る必要があるので、相手の立場に立って考えることができるようになった。



#### 4 研究のまとめ

本分科会では、以上のような段階を踏んだ学習活動の流れの中で、ディベートを有効に活用することにより、生徒一人一人が興味・関心をもち、主体的に活動し、「聞く力」と「話す力」を身に付けることをねらいとして研究を進め、次のような成果を得ることができた。

- (1) ディベートの論題の設定をアンケートによって生徒に選択させたことで、主体性、生徒の興味・関心を喚起することができた。
- (2) 論題について、肯定・否定の立場を明らかにし、その理由を「意見文」としてまとめさせた。自分の意見を書くことで、論題に対する意識が深まり、人前でより適切に筋道だてて分かりやすく発表するためのきっかけとすることができた。
- (3) 生徒一人一人が全体の前に立ち、「意見文」を発表することで、声の大きさ、発音、間の取り方などに留意し、聞き手に分かりやすく表現する（話す）ことの大切さを実感することができた。
- (4) 相手の話をしっかり聞く力を育てるため、「意見文」の発表と同時に「聞き取りメモ」を用いて、発表者の意見について要点を記入させた。その結果、生徒は他人の発表を真剣に聞きとろうとする態度が身に付いた。また、説得力のあった意見文を発表した者を生徒たちに選ばせたことで、生徒は相互評価する力を高めることができた。
- (5) 全ての肯定・否定派のグループが立論作成をする中で、相手への質問と応答を考えた。立論については「意見文」を、相手への質問・応答については「聞き取りメモ」を考察材料とすることで、これまでの学習活動を生かしながら、積極的な意見交換を行い、どのグループでもディベーターになる得る態勢をつくることができた。
- (6) ディベートマッチの実施によって、ディベーターとなった生徒は相手の意見をしっかり聞き、自分の意見を分かりやすく話そうとする姿勢がみられた。また、作戦タイムを有効に使おうとすることで、グループ内での協力、協調性を養うこともできた。
- (7) 判定者となった生徒は、自分なりの評価、判定を行うが、「判定・記録用紙」を用いてディベーターの発言をまとめ、さらに、ディベーターへの質問の機会を設けることによって、より真剣に論戦を聞き、判定者として適切な評価、判定をすることができた。

以上のように、ディベートを有効に活用した学習活動を行うことで、生徒一人一人が興味・関心をもって主体的に、「聞く力」と「話す力」を高めることができた。

これからの課題として、教師は、生徒のもつ興味・関心、あるいは発達段階その他の違いに留意し、論題の収集・設定やディベートマッチに関するフォーマットの設定をすることが課題となる。特に論題の設定については学習活動のカギとなる重要なものなので、生徒にとって興味・関心をもて、しかも議論が肯定・否定に明確に分かれるような、偏りのない論題をいくつか提示する必要がある。また、今回の学習活動では、ディベートマッチが評価の全てではなく、ディベートマッチを含めて、そこに至るまでの学習過程で、一人一人の生徒が「聞くこと」「話すこと」について、どの程度主体的に取り組み、その力を身に付けることができたかが評価の観点となる。そうした点をどのように評価するか、その方法については今後の研究で検証していきたい。

## IV 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

国語教育の今日的課題と生徒の実態から、生徒が興味・関心をもち、学習に主体的に取り組むことが大切であると考えて本研究の主題とした。その主題を表現指導と教育機器の活用を図る指導をとおして、具体的な指導法の工夫を実践的に研究を進めてきた。

本研究では、生徒が興味・関心をもって主体的に取り組む学習活動を、

- ① 個々の生徒が自己にあった学習課題をもつ。
- ② 学習課題の解決に向けて意欲をもって取り組む。
- ③ 楽しみながら学習活動に積極的に参加し、次の学習課題を発見する。

以上の一連の活動であるにとらえた。

この考えに基づき、教育機器を活用した個々の能力にあった指導法の工夫と、音声言語活動を活発にし、表現や理解の複合的な力を育てるディベート指導法の工夫を取り上げた。研究の結果、明らかになったことは以下のとおりである。

#### 【教育機器活用研究班】

- ① コンピュータ機器を使用したことにより、生徒は自分の進度にあった教材を学習することができ、授業時間否でより密度の高い学習内容を主体的に得ることができた。
- ② ネットワークシステムを使用したことにより、従来の授業よりも個々の生徒の作品・意見を随時他の生徒に提示できた。その結果、生徒の自己評価力・相互評価力が高まり主体的に自己の学習内容を向上させることができた。

#### 【音声言語研究班】

- ① 意見文の発表によって、分かりやすく話そうとする態度を意識するようになった。
- ② 聞き取りメモの活用によって、人の意見をしっかり聞こうとする態度が見に付いた。
- ③ 立論を作成する作業のなかで、自分たちの考えをまとめ、深めることができた。
- ④ ディベートを活用することで「聞く力」「話す力」を高めることができた。

### 2 今後の課題

また、今年度の本研究を振り返って、今後、生徒が興味・関心をもち、主体的に活動する国語学習を充実するため研究を進めるべき課題としては次のような点を挙げることができる。

#### 【教育機器活用研究班】

- ① 単元の目標に合わせたコンピュータ機器等の活用の仕方を工夫していく必要がある。
- ② 入力操作の習熟に関して、学校体制ができるように努力する必要がある。
- ③ コンピュータ及び周辺機器等の整備・充実を行政に要請していく必要がある。

#### 【音声言語研究班】

- ① 生徒の興味・関心がもてる論題の収集と設定の仕方を工夫する必要がある。
- ② 教師の評価を指導過程の中にどのように組み入れていくか、追究する必要がある。
- ③ 生徒の発達段階に応じた、ディベートマッチの形式について実践的に研究する必要がある。